

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13003

研究課題名（和文）20世紀フランス前衛美術における価値評価システムの形成と美術制度の役割

研究課題名（英文）Formation and Institutionalisation of the value system in the 20th Century
Avant-Garde Art

研究代表者

松井 裕美（Matsui, Hiromi）

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：40774500

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：1. 第二次世界大戦までのフランスによる前衛美術の国家購入資料を分析し、その年次変化をまとめた上で、政治・社会の動向との関係について考察した。2. 19-20世紀のリアリズム概念の変化について検討した。3. 1930-80年のフランス前衛美術において、伝統概念や宗教概念がどのような影響を与えていたのかを考察した。4. 1960-80年の英語圏の美術におけるフランス美術・思想の影響について検討した。5. 1970年以降のモダニズム美術史への批判的な応答の中で、モダニズム美術が別の判断基準からその価値と位置付けを捉え直されていくことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究期間中の研究においては、国家購入の価格や国家購入の時期、美術批評や美術史といった言説の変化、国際的な評価や新しい芸術動向における批判的継承など、様々な手法によって、フランスを中心とする前衛芸術の価値形成のプロセスを多角的に明らかにした。その際、文学史や科学史、思想史など、分野を超える学際的視点を導入しながら、従来の美術史的な通説に対し見直しを迫る研究を展開したことは、この研究の学術的意義である。また、こうした成果を展覧会図録解説や一般書として公開し、アウトリーチ活動を行ったことは、この研究が持つ社会的意義でもある。

研究成果の概要（英文）：This study 1. analyzed documents on the French state's purchases of avant-garde art until World War II, summarized their annual changes, and discussed their relationship with political and social trends; 2. examined changes in the concept of "realisme" during the 19th and 20th centuries; 3. examined the influence of the concepts of tradition and religion in French avant-garde art during the 1930s-60s; 4. examined the influence of French art and thought on American and British art in the 1960s and 1970s; and 5. revealed that as a critical response to modernist art history after the 1970s, modernist art's value was reconsidered and positioned according to different criteria.

研究分野：美術史

キーワード：前衛美術 キュビズム 価値形成

1. 研究開始当初の背景

美術作品の価値を決定づける諸要因としては、一般に(A)美術市場(B)美術批評(C)美術制度の三つを挙げることができる。17世紀以降ヨーロッパの各地で整備された美術アカデミーは、フランス革命以降も美術学校として存続し、卓越した技術を若い世代の芸術家たちに継承するだけでなく、美術教育制度をととして、芸術の価値を評価するシステム(以降価値評価システムと呼ぶ)を規定した。この意味では、17世紀から19世紀中頃までは(C)制度が価値評価システムを決定する重要な要因であった。これに対し、20世紀美術においては(C)制度よりも(A)市場と(B)批評のほうが価値評価システムを方向づけるうえで重要になるとこれまで考えられてきた。というのも、ホワイト夫妻の19世紀美術研究(H.C. & C.A. White, *Canvases and Careers*, 1965)に続いて登場したR・ジェンセンやM・ワードによる社会学的な世紀転換期の美術史研究(R. Jensen, *Marketing Modernism in Fin-de-Siècle Europe*, 1994. M. Ward, *Pissarro, Neo-Impressionism, and the Spaces of the Avant-Garde*, 1996)が明らかにしているように、芸術家を社会的な抑圧や経済的な困難から解放し前衛的な制作を支援するような「画商-批評家システム」が、アカデミー体制の衰退とともに台頭したからである。実際こうしたなかでこそ、制度の枠組みにとらわれない様々な前衛芸術が19~20世紀の転換期にかけて登場し、20世紀の前衛美術を支える市場と批評空間の形成へと結びついた(M. Gee, *Dealers, Critics, and Collectors of Modern Painting*, 1981. M.C. Fitzgerald, *Making Modernism*, 1995)。

しかし本研究では、こうした研究で看過されてきた、20世紀美術の価値評価システムにおける美術制度の役割について検討する。申請者は近年の研究において、1920年代のフランスで前衛芸術の登場にあわせて制度の側も変化したことを明らかにした。例えば美術館は1920年代から前衛的な傾向を示す芸術家たちの作品の収集を拡大した。また前衛芸術家たちも、アトリエを拓き、自らの芸術的实践を普及するような教育制度を整備した。さらに、1922年の『革命から今日までの美術史概説』(A. Fontainas & L. Vauxcelles, *Histoire générale de l'art français de la Révolution à nos jours*, 1922)の出版を機に、美術史的な著書においても前衛芸術は価値あるものとして記述されるようになった。では、そうした制度の変化は、どのような価値基準を構築し、さまざまな様相を見せる前衛芸術のなかでも、どのような理由からある特定の運動様式を評価するに至ったのだろうか。

2. 研究の目的

本研究課題では、上記の問いに取り組むために、とりわけ次の三つの点、()美術館制度による前衛芸術の作品購入、()前衛芸術家による教育制度・徒弟制度による前衛の制度化、()美術史的な学問制度による前衛運動の承認を軸に調査と考察を進めた。

【 . 美術館制度による前衛芸術の作品購入】本来であればあらゆる枠組みから逸脱する存在であった前衛美術が、美術館制度の枠組みのなかで承認されていく過程を解明するために、20世紀前半のフランスの美術館において前衛芸術が美術館購入の対象となるまでのプロセスや、作品購入の傾向の年次変化を明らかにすることが第一の目的である。フランスでは1818年にリュクサンブール美術館が最初の同時代芸術を収蔵する美術館となり、20世紀には多くの前衛芸術をコレクションした。さらに1922年に開設されたジュ・ド・ポーム美術館の外国人現代美術部門では、国際的な前衛芸術もまた購入の対象となった。また1937年の万国博覧会は、前衛的な芸術作品をパリ市が国家予算により購入する機会となった。こうしたコレクションの概要についてはこれまで先行研究で明らかにされてきたが(J.P. Lorente, *Les musées d'art moderne ou contemporain*, 2010) 本研究では、これまで明らかにされていない次の2点、すなわち a) どのような作品がいつどのように、いくらで取引されたのか、b) 寄贈や購入が失敗した案件については、どのような要因でそうした事態にいたったのかについて調査し、統計的手法により解析した。実際、こうした詳細情報を把握することは、価値評価システムを正確に理解し、市場と制度の関わりを解明するうえで必要不可欠であった。

【 . 前衛芸術家による教育制度・徒弟制度による前衛の制度化】芸術家自身が教育を通して前衛美術を制度化する経緯を分析するために、前衛芸術家が私的なアトリエでどこした美術教育の手法を調査した。フランスにおける前衛芸術家の美術教育については、P・ランソンやA・ブルデル、H・マティス、F・レジェ、A・ロート、A・グレーズなど、多くの画家たちが取り組んでいるにもかかわらず、その実態の多くは知られていない。なかにはアカデミー教育と変わらない手法がとられていたとする見解も存在するが(D. Poulot, J.-M. Pire et A. Bonnet (dir.), *L'Education artistique en France*, 2010) グレーズのように中世の修道院生活への憧憬を反映させた独自の理論にもとづく教育方法をとっていた芸術家もあり、一概には捉えられない。そこで本研究では、個々の事例調査を遂行し、20世紀前半に考案された、前衛美術を生み出すための教育方法とその理念について分析した。

【 . 美術史的な学問制度による前衛運動の承認】学問分野における前衛美術の評価システムの

形成について新たな光をあてるために、同時代の美術史家による講演会や記述において、前衛芸術運動や運動に関わった芸術家がどのように位置付けられていたのかを考察した。20世紀前半の美術批評や、19世紀以前の美術について著述する美術史的な著述はこれまで盛んに研究されてきたが、同時代に執筆された前衛美術についての美術史的な学術書の研究については十分にこなされてこなかった。本研究では、美術史の専門書や概説書の言説に注目することで、学問制度もまた新たな価値の承認と発展に貢献し得たことを論証した。

3. 研究の方法

美術館制度による前衛芸術の作品購入の分析にあたっては、フランス国立公文書館(パリ)やフランス国立近代美術館を調査し、美術館購入資料を入手した。ナビ派やフォーヴ、キュビスムといった、フランスを中心に展開した芸術運動について、とりわけ明らかにした。

前衛芸術家による教育制度による前衛の制度化の考察にあたっては、当時教育にあっていたグレーズやロートの著述や書簡を、カンディンスキー図書館(パリ)やフランス国立図書館(パリ)で調査した。

美術史的な学問制度による前衛運動の承認の考察にあたっては、フランス国立図書館やフランス国立美術史研究所図書館、カンディンスキー図書館で調査した。分析にあたって、外国人のもたらした「エコール・ド・パリ」(パリ派)と、フランスの芸術、すなわち「エコール・フランセーズ」(フランス派)の定義の違いに注目することで、ナショナリズムや古典主義がこうした言説に与えた影響を考察した。さらに、20世紀前半に顕著となるプリミティヴィズムや、20世紀後半に顕著となるフェミニズムをはじめとする思想的な潮流が、どのように美術史的言説に影響を与えるのかについても考察した。

以上のような資料調査にもとづく新たな観点からの分析をとおして、最終的に(C)制度を着眼の中心に据えた本研究の成果を、(A)市場と(B)批評に関する先行研究の成果をと関連付け検討することで、価値評価システムの変遷の諸要因における(A)市場・(B)批評・(C)制度の関わりをとらえなおすことを目標とした。

4. 研究成果

1年目は、前衛芸術家と制度の関係について下記の3点の研究成果を得た。1)モダン・アート史の形成と古典主義：西洋文化における模範・基準・規範としての「古典」がどのようなかたちをとってきたのかを考えてみると、実のところ一般に考えられているほど「古典的なもの」の輪郭が確固たるものではなく、可変的なものであり得たことが浮かび上がってくる。スタンダードと規範、モデルとモデルからの逸脱といった様々な概念・現象の配置やそのダイナミズムの中で、どのようにモダン・アートの歴史が誕生したのか考察した。またこのテーマについての意見交換の場を設けるために、東京大学において国際シンポジウム「過去の巨匠と近代芸術」を主催した。

2)美術史の攪拌：美術史が形成され制度化されるや否や、あらゆる様式的分類を逸脱する芸術家が登場する。パブロ・ピカソがその一人である。そのような逸脱において「造形的メタファー」が果たした役割について考察し、共著の分担執筆論文として出版した(大高保二郎・永井隆則編『ピカソと人類の美術』2020年)。

3)前衛の制度化と抵抗：ピカソのような前衛的な芸術家であっても、決してモダニズムの歴史が描くような孤高の天才ではなく、パトロンや批評家など様々な人々の支援があって成功し、名声を得た。ピカソを例に、前衛と美術制度や市場との関係について考察し、論考として出版した(松井裕美「ピカソの名声形成の諸要因と自画像の変遷」『立教大学フランス文学』2020年)。

4)前衛とマイノリティ：前衛は、どのような集団であれメインストリームの文化に対し抵抗する性質を共通して持っているが、前衛の歴史の中にも中心と周縁が再生産されることになる。その点に注目し、女性画家や日本人芸術家、プリミティヴィズムやオリエンタリズムに注目する研究を遂行した。その一環として、神戸大学で「イスラム美術コレクションの形成と普及」と題するワークショップを主催した。

2年目は、美術市場、美術制度と美術史的言説の形成について下記の5点の研究成果を得た。

1)古典主義の諸相：美術史において価値形成の一つの基準となる「古典」という概念がどのような歴史の変遷を辿ったのかを明らかにし、共同研究の成果として『古典主義再考』と題した2巻本の共編著を上梓した。

2)前衛美術作品の公的コレクション形成：昨年度収集を終えた、20世紀前半のフランスにおける国家買取に関する一次資料データを整理した。その成果は2022年度に共著の分担執筆論文として出版した(大久保恭子編『戦争と文化』2022年)。

3)前衛美術と諸制度：デイヴィッド・コッティントンのA Very Short Introduction:Modern

Art の翻訳作業を手がかりに、前衛美術と美術館などの制度や、美術市場といったシステムとの関わりについて概観した。またコッティントン氏と連絡を取り合い、この件に関する最新研究の情報収集を行なった。

4) フェミニズム美術史：制度化された美術界における女性の位置付けについて、フェミニズム美術史の先行研究を手がかりにしながら考察した。

5) レアリスムの諸相：19～20世紀のフランス、イギリス、ドイツにおけるレアリスム/リアリズムの諸相について俯瞰すると同時に、ヌーヴォー・レアリスムやフィギュラシオン・ヌーヴェルなど戦後の前衛美術における「現実」概念と、戦後の思想史における日常生活論についても考察した。その成果は翌年度に共著書中の論文として発表した(『レアリスム再考』2023年)。またカジャ・シルヴァーマンの『アナロジーの奇跡』の翻訳作業を手がかりに、写真イメージと現実との関係に関する考察にも着手した。

3年目は、美術教育と美術制度、美術史的言説が価値形成に与えた影響について研究し下記の3点の成果を得た。

1) 前衛芸術家による美術教育が価値形成に与えた影響についての検討：とりわけキュビズムの画家アルベール・グレーズによる美術教育について、一次資料を収集しつつ調査を進めた。グレーズは、1930年代以降、独自のキリスト教信仰を美術教育に反映させていくなかで、集団的な生活や制作への関心を高め、宗教的な画題の作品も描くようになっていった。そうした試みが単なる「秩序への回帰」では捉えられないような革新性も備えていたことについては、論集『宗教遺産テクスト学の創成』(木俣元一・近本謙介編)に寄稿した論文「キュビズムと聖性 アルベール・グレーズのキリスト教信仰と失われた宗教壁画」(2022年3月)および、『美術フォーラム21 第45号前衛特集』掲載の論文「前衛芸術とポスト・ヒストリー キュビズムにおける錯綜する古典という参照点」において論じた。

2) 「作者性」の概念の揺らぎと美術制度との関わり：フランスの60年代の前衛運動において重要な役割を果たしたヌーヴォー・レアリスムに注目し、とりわけイヴ・クラインのパフォーマンスとそれを取り巻く言説を分析した結果を、『聖性の物質性』(木俣元一・佐々木重洋・水野千依編)に寄稿した論文「色彩における物質性と聖性 イヴ・クラインの芸術実践における聖別と洗神のあらい」にまとめた。

3) レアリスム概念の変遷と価値転換：キュビズムやヌーヴォー・レアリスムに代表されるような「新しいレアリスム」を主張した芸術運動の背景にある文学的・美学的議論について調査した。その成果については、今後『レアリスム再考』と題した論集の序章にまとめた。

4年目は、これまでの研究成果を総括するために、16世紀から18世紀までの美術史的な言説に関する著書を調査し、とりわけ「現実」や「レアリスム」といった観点から19世紀から20世紀のフランス絵画史との関係性についてより精緻な検討を行った。「現実」や「レアリスム」は、20世紀の美術史においても、フランス的な伝統を定義する上で重要な概念として登場する。だがそうした概念が、実際にはどのような作品を対象として用いられていたのかについては、歴史的な交渉が必要である。そうしたことを知る上で欠かせない基礎的な美術史研究の著書を精読した。

5年目は、美術制度と美術史的言説の展開が価値形成に与えた影響について研究し、下記の3点の成果を得た。

1) キュビズムの普及の多角的分析：キュビズムのフランス内外における発展と、キュビズムの芸術家たちによる美術教育という二側面が、近現代美術史に与えた影響について考察し、著書『もっと知りたいキュビズム』にまとめた。

2) 芸術家によるモダニズム的な美術史への批判的応答：モダニズム的な美術史を見直し新たな美術史を編む批判的パフォーマンスを実施したロバート・モリスの作品《サイト》についての研究を遂行すべく、8/31-9/17にパリ出張を実施し、パリ国立図書館やカンディンスキー図書館で調査を行った。カンディンスキー図書館では、モリスの修士論文のコピー、パリ国立図書館では批評家ロザリンド・クラウスとモリスが出演する動画といった、貴重な資料の閲覧をすることができた。その結果は、論考「ロバート・モリス《サイト》(一九六四年)をめぐる解釈のせめぎあいとマイノリティの身体」『文学部附置人文科学研究所周叢』(青山学院大学、2024年3月)としてまとめ、フランス美術史の批判的受容がミニマリズムとフェミニズムの芸術実践においてどのように位置づけられるのかを考察した。

3) 美術史家によるモダニズム的な美術史への批判的応答：近現代の美術史的方法論を身体的記憶の映像という観点から問い直す論考「Diagram of the War Landscape in Harun Farocki's Images of the World and the Inscription of War (1988)」が、論集『Paysage(s) de l'étrange II』(Susanne Muller, Aurelie Michel 編, Le Bord de l'Eau, 2023年)に掲載された。同じ観点から美術史家ディディ＝ユベルマンの思想を捉え直した論考「ジョルジュ・ディディ＝ユベルマンにおける「感性的なものの分有」－「蜂起」展(2016年)をめぐる議論を軸とした一考察」は、近日中に雑誌『美術フォーラム21』に掲載される予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 松井裕美	4. 巻 0
2. 論文標題 「公式の趣味」の変遷とヴィシー政権下における美術作品の国家購入	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 戦争と文化：第二次世界大戦期のフランスをめぐる芸術の位相	6. 最初と最後の頁 125-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松井裕美	4. 巻 45
2. 論文標題 前衛美術とポスト・ヒストリー キュビズムにおける錯綜する古典という参照点	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 美術フォーラム	6. 最初と最後の頁 37-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松井裕美	4. 巻 1月号
2. 論文標題 美術史を語ること、語り直すこと	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 94-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松井裕美	4. 巻 0
2. 論文標題 キュビズムと聖性 アルベール・グレーズのキリスト教信仰と失われた宗教壁画	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 宗教遺産テキスト学の創成	6. 最初と最後の頁 467-490
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松井裕美	4. 巻 0
2. 論文標題 色彩における物質性と聖性 イヴ・クラインの芸術実践における聖別と洗神のあわい	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 聖性の物質性 人類学と美術史の交わるどころ	6. 最初と最後の頁 593-626
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松井 裕美	4. 巻 55
2. 論文標題 母親の欲望を解剖する：メアリー・ケリーの《産後資料》におけるポリフォニーとラカンの精神分析学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際文化学研究：神戸大学大学院国際文化学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 135～168
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24546/81012663	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松井裕美	4. 巻 122
2. 論文標題 台座・ラベル・ジェンダー - ハンナ・ヘーヒにおけるイメージの構築と解体、そして再構築	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 近代	6. 最初と最後の頁 84-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松井裕美	4. 巻 49
2. 論文標題 ピカソの名声形成の諸要因と自画像の変遷	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立教大学フランス文学	6. 最初と最後の頁 29-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松井裕美	4. 巻 -
2. 論文標題 ピカソの「空想美術館」 「恣意的な記号」の射程から生まれるメタファーの意味をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ピカソと人類の美術	6. 最初と最後の頁 105-135
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 松井裕美
2. 発表標題 歴史の中のレア リズム 美術理論における意味の変遷
3. 学会等名 リアリズム文学研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松井裕美
2. 発表標題 アナロジーの横溢－カジャ・シルヴァーマンの写真論を手がかりとして
3. 学会等名 連続講演会「文学としての人文知」第4回「イメージの歴史」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松井裕美
2. 発表標題 台座・ラベル・ジェンダー
3. 学会等名 香川檀著『ハンナ・ヘーヒ 透視のイメージ遊戯』オンライン書評会 2020年7月18日(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Hiromi Matsui
2. 発表標題 Entre l' influence et la contagion : le classicisme et la formation artistique dans la culture d' avant-garde
3. 学会等名 過去の巨匠と近代芸術 受容・反復・再解釈 (19~21世紀) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Hiromi Matsui
2. 発表標題 Lecture croisee entre Ruskin et les artistes d' avant-garde du 20eme siecle en France
3. 学会等名 国際シンポジウム 『Ruskin et la France』 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松井裕美
2. 発表標題 第二次世界大戦下の独立派芸術作品と国家購入
3. 学会等名 国際シンポジウム 『第二次世界大戦期のフランスをめぐる芸術の位相』 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hiromi Matsui
2. 発表標題 Between Visibility and Invisibility: Diagram of Landscape in Harun Farocki's film works
3. 学会等名 Freie Universitat Berlin - Kobe University - Ritsumeikan University Joint Workshop on 'Landscape and New Media in Art, Film and Theatre' (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 松井裕美	4. 発行年 2023年
2. 出版社 三元社	5. 総ページ数 584
3. 書名 レアリスム再考	

1. 著者名 木俣元一、松井裕美	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 312
3. 書名 古典主義再考 前衛美術と「古典」	

1. 著者名 木俣元一、松井裕美	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 480
3. 書名 古典主義再考 西洋美術史における「古典」の創出	

1. 著者名 松井裕美	4. 発行年 2023年
2. 出版社 東京美術	5. 総ページ数 80
3. 書名 もっと知りたいキュビズム	

1. 著者名 デイヴィッド・コッティントン、松井 裕美	4. 発行年 2020年
2. 出版社 名古屋大学出版会	5. 総ページ数 224
3. 書名 現代アート入門	

1. 著者名 カジャ・シルヴァーマン	4. 発行年 2022年
2. 出版社 月曜社	5. 総ページ数 352
3. 書名 アナロジーの奇跡 写真の歴史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>松岡佳世氏による講演会「非合理的な身体のための解剖学：ハンス・ベルメールと 交換可能性」 https://www.modernarts.info/post/report_2022_1_27 国際研究会『過去の巨匠と近代芸術』（東京大学・2020/01/22）実施報告 https://www.modernarts.info/post/maitresanciens 研究会『イスラム美術コレクションの形成と普及』（神戸大学・2019/09/30）実施報告 https://www.modernarts.info/post/artislamique_france_japon</p>
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 過去の巨匠と近代芸術 受容・反復・再解釈 (19~21世紀)	開催年 2020年~2020年
国際研究集会 研究会「イスラム美術コレクションの形成と普及 東洋と西洋の眼差しの交叉」	開催年 2019年~2019年

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------